

建築家の檻



連載 9

Grasshouse

<http://p.booklog.jp/book/97575/read>

案の定、終電を逃してしまった。

僕は十二時を過ぎたころから薄々今夜はこうなるだろうと予測していたけれども、アルコールが廻ってしまうと、駅の雑踏に行くのが億劫になってしまう。

それに最近、夜はかなり寒いのだ。

明日はとくに打合せはないし、このまま朝まで飲み明かしても問題はなかった。もっとも午後まで使い物にはならないだろう。このまま何時まで飲むのかは、辛島さんと色川さんの二人次第というわけだ。

音声がまた途切れてきたので、僕はイヤホンを離した。

「しかし何でこんなものがテープに」

「フッフ。それは秘密。ちょっと、守秘義務があつてね」

辛島さんはニヤリと笑い、パイプの端をくわえて眼を細めた。

「律子ってのは、娘だけあつて、なかなか会長のなだめ方を知ってるね。それにしても……社員に自我はいらないのって言葉、あれこそ律子の本音だろう」

「凄まじい企業の私物化ですね。ところでタンゲイズムって何ですか？」

僕は尋ねた。

「さあ。つべこべ言わずに自己犠牲の精神で額に汗して働くこと、じゃないかなあ」

「日本の企業の厭らしい部分を、全部集約させて結晶体にしたような会社だな。単なる利潤追求の集団じゃなくて、この一族、自分たちに崇拜を強いている」

色川さんは、腕を組む。

「企業だか、幕藩体制だが、カルト宗教だかわからんような空間に、あの築地の軍艦ビルの内
部は、管理されている」

「あ、長崎の軍艦島じゃなくて、築地の軍艦ビルね」

僕は辛島さんの言葉に、思わず笑った。

「そう。……例えば正月なんか、成城の丹下邸で新年会があり、毎年社員やグループ企業の幹部や、出入りの業者が年始に訪れるんだ。そのとき福引をさせて、丹下家の人間が日頃使っていたバッグや日用品を与えるという習慣があるらしい。昔の大名や華族様じゃあるまいしね。しかしそれを連中は、ありがたそうに頂くんだよ。新年会ではカラオケや福笑いのほか、隠し芸大会があつて、一幕コントなども披露される。その年の職場のエピソードとネタにしてね。ところがそれがみんな、水戸黄門なんだよ」

「何ですよ、それ？」

「いつも同じワンパターンのオチさ。社員一同無能ゆえにいろいろ至らぬ面もありましたけど、最後は上司の皆様と丹下会長様のお陰で万事うまくいきました、ジャンジャン。――という予定調和的なオチになるの」

「ほ、ほ、封建的」

「もっとひどいのは、歌会始でも意識してるのか、丹下歌人会や、顧問の谷田部の俳句同好会『竹林会』の連中を動員して、一句作らせる習慣。会社の繁栄や、丹下一家を讃える歌を作らせて、社内文化とか丹下カルチャーとか称して悦に入ってるんだな。三代目の義彦の結婚した年や、四代目の晴臣が誕生した年は、大盛況だったらしいね。特にあの谷田部は、うまく立ち回って、律子のことを大輪の花や牡丹に譬えて詠み込んだりするので、覚えめでたいらしい。待遇も相当いいんじゃないかな」

「吐き気がする」

色川さんは憤然として、大きく鼻孔を広げた。

「ただ今年の新年会は、ひどかったというね。公共工事が激減して業績が下がったためか、喜作が荒れまくってね。大勢の客の前で、婿養子の伸雄、副社長をいびりまくったそう」

「そういう役割なんだ、あの人」

僕はあのインド人物理学者のような顔をした実直そうな副社長に、少し同情的だ。

「おトソでべろんべろんになった喜作が、伸雄にドジョウすくいを披露しろだの、カッポレを踊れだのと無理強いしたので、あの難しい顔をした副社長も逃げ場がなくて、客の前で泣き顔をして、踊ったそう。ハチマキをつけ、脂汗たらして。ところが何が気に食わなかったのか、真剣にやってないってんで、喜作がとつぜん火をふいたように激怒した。テメエは俺のことをなめてんのかと言いながら、婿さんの顔にお屠蘇を、ヒョイと引っかけたそう」

「無茶苦茶ですね、もう」

「昔の軍隊のいじめだわ、それ。……こら、蟬やれ、蟬。ミーンミーンていうやつ」

お調子者の色川さんは、止まり木の椅子の上で中腰になり、両手を腰にあて、蟬の物マネまでしてみせた。深夜みんな疲れているのに、カウンターの狭い空間でこんなデブ男に動かれると、傍迷惑というものだ。

「それでも出入りの業者連中は、殿のお戯れということで温和に微笑み、何事もないかのように眼を細めて酒を啜っているわけ。次の瞬間には誰が血祭りに上げられるか、戦々恐々としながらね」

「何だか、悲しいですなあ、日本の企業って」

「その丹下邸、覗いてきたんですよ。丹下ファミリーの性格が、実によく出てたけど。棘だらけって感じで」

僕は口を挟んだ。

「フムフム。あの鷺巣数光設計の怪作ね」

「ああ、知ってるんですか、辛島さんもあそこ？」

「いや、直接は見てないけどさ。成城学園なら新宿からも近いし、いつでも見られると思ってね」

。天文台、あったでしょ。あれ聡太郎の趣味なの。二代目社長」

「聞いてます、聞いてます。でも、あのヒグマ社長が、望遠鏡で星を見るんですか」

「子供のときからの趣味で、毎晩ニコニコしながら望遠鏡を覗き込んでるんだよ。彗星なんか来ると、もうあのヒト大変な騒ぎらしいね」

「見かけによりませんね」

「家族や社員からはもう馬鹿扱いなんだけど、どうなんだろう。ひよっとしたら、昼行灯というのか、何かありそうだな。奇妙に目が落ち着いているんだ。あのヒト、案外、喜作の周辺のドロドロした人間関係に、うんざりしているのかもね。僕はひそかにムイシュキン公爵と呼んでいるんだけどね。ドストエフスキー『白痴』の主人公」

「なるほどね。悪辣さは、ないかもしれない」

「……この聡太郎は、例の喜作の満州時代に、ハルピンのロシア人娼婦に生ませた子供と言われてるけど、まあ相手は今で言う主婦売春だったみたいだ。オルガとかいう絶世の美人で、もとは何でも帝政ロシア時代には貴族の家柄で云々かんぬん……。そこでまた、喜作爺さん特有のホラ話が始まるわけよ。当時の混血児というと、まず世間体を考えてしまうものなんだが。あの丹下喜作という男の妙なところは、反対に自分からあちこちで言い触らしたんだね。ロシア美人を首ったけにさせたって、大層、ご自慢なんだ。でもあの時期の満州諸都市は、日本人、ロシア人、中国人、蒙古人、朝鮮人と、人種の坩堝で、ごった煮だったからね」

「そういえば、岸信介や東條英機と、宴会で同席したようなこと言ってましたけど」

「それ、得意のエピソードなんだよね。満鉄やら、関東軍関連の土木工事、高級将校たちの邸宅の建設など、いろいろ手を広げていたらしいけど、虎の威をかる何とやらで、かなりアコギなこと、やってたんだろう。満鉄や満映人脈、里見アヘン人脈、兎玉機関、匪賊上がりともいわれるギャングの張周明一味や、七三一石井細菌部隊まで、どこまでかわり合っているのか」

「辛島さん、ひよっとして、まさか、その辺を追究しているとか」

「おい……羽木クン、そこはキミ」

色川さんが、偉そうに瞑目したまま、右手を伸ばして僕を制した。

「いや、ちょっとね、フッフ。ほら、僕は羽木君の前任者だったろう。その取材というか、ヒアリングの途中で、妙なことに気付いたんだ。喜作爺さんが語ろうとすると、どういわけか、とつぜん律子専務がドアを開けて、つかつかと会長室に入ってくるんだよ。すでに午後も遅くなっていて、会長室脇の丹下バーで、喜作が一杯やっていると、それをまた専務は大ごとにして怒るんだな。しらじらしくグラスや氷を片付け始める。せっかく核心部に触れかかっていたのに、取材にも何にもなったもんじゃない。最初は偶然だろうと思っていたけど、四回か五回そんなことが続くと、ははん、これ、どこかに盗聴器がしかけてあるなと思うわね、誰だって」

「つまり、満州のヤバイ人脈のことを、会長が調子に乗って語り出すと、なぜか律子専務が部屋に入って来る……。さすがTCIA長官」

僕は反芻するようにつぶやいた。

「うん。岸信介や、東條英機と同席したような自慢話は、まだいいらしいんだよ。白元老師とか廣澤大悟郎とか、そこまではOKなんだ。しかし、とくに石井細菌部隊の話とか、張周明の話にさ

しかかると、女専務は、いきなり血相を変えて飛び込んでくるんだ」

「張周明って、ハルピンの悪魔城の主でしたっけ。帝冠様式の楼閣の。ラストエンペラーの溥儀を気取って、黒眼鏡かけてチャイナ服着てた奴ですよ。ちょっと唇にニヒルな笑みを浮かべた」

「なんだか、死神みたいに痩せた男な。周りに美女はべらせてさ、いい気なもんだわ」

色川さんも口を挟んだ。

「そう。その張という男は、終戦のどさくさの時に、ハルピンで焼打ちにあって殺されたということになっている。しかし、その後調べていくと、どうも戦後も生き延びて、幾つかの変名を持ちながら、日米中韓朝の間でいろいろと裏工作しているらしいんだ」

「えっ。日、米、中、韓、朝？」

「うむ。張って男は、どうも戦時中も、二重スパイ三重スパイとしか思えぬような動きがチラつくんだ。それについてはただいま調査中だ。……それはともかく、律子の動きも、絶対におかしいんだよ。その二つのタブーにふれると、偶然に入ってくるんだ。お父さん、病院に行く時間でしょうか、折り入って話があるのとか、下のロビーで誰々さんを待たせてあるから、とかいってね。そんなの全部、嘘なんだけどね。間違いなく、盗聴しているんだ。娘が入って来る度に、調子に乗って語っていた喜作爺さんの方は気分を害して、お前何しに来たんだとかいって、怒鳴り出すわけ。そのうち、あの『丹下精神注入棒』を振り回して、つまらん親子喧嘩が始まるのさ。馬鹿馬鹿しい。僕はねえ、途中からこれは絶対、何か裏があると思ったね」

「暇だねえ。もう、仕事しろよ、オバハン」色川さんはクククと笑った。

「というわけでさ。さあてと、ここからが、いわば僕のオリジナルの仮説になるんだけど。……一九四五年の七月、関東軍が満州を撤退する前後、喜作爺さん、張の一派とともに、例の爆破処理を手伝ったんじゃないかと」

「え？」

僕と色川さんは、同時に顔をあげた。

「例のバクハ、ショリ。何のことですか、それ」

僕の声は、かすれていた。

辛島さんは、栗色のつややかなパイプを、口から離した。

そして前を向くと、ふーっと白い煙を吐いた。

「旧関東軍防疫給水部本部。いわゆる七三一石井細菌部隊さ」

天井がタバコの煙でかすみ、ざわめきが消えた。

何か聞いてはいけなかったことのようにも僕は思った。こんなことは、知るべきではなかったかも知れない。

「つまり、日本の敗戦が決定的になり、ソ連軍の南下の情報が入って来ると同時に、証拠隠滅というわけさ。そして関東軍は一般の日本人家族を置き去りにして、逃げた」

ママはトイレに入っていて、カウンターの中には誰もいない。

十人も入れればいっぱいになってしまう深夜の狭い酒場には、MJQのビブラホーンとピアノの音が、冷たく鳴り響いていた。

とりあえず僕は、喉がカラカラに乾いているような気がした。そこで戻って来たママに、新たにビールを一本頼んだ。

「あの、ミイラ化した腕が、丹下神社の御神体にされているって噂聞いたんですけど。ええと、芳田さんの情報だったかな」

僕は別な話題にずらしたかった。

「うん。神社というのは、屋上庭園にある鷲巢数光のオブジェみたいな建築物ね。でも腕が御神体になっているというのは、どうかな。でもその話はさ、いまのつながりがあるんだよ。おそらく爺さんの片腕がブツ飛んだのは、一九四五年の夏、爆破処理のときのさ」

ビールの泡が、白く細かくコップの上層に集まって来る。

「あんにゃろ、そういう、ことなのか」

怒ったように色川さんがいって鼻息を荒くした。

「しかし、しかし待てよ。いくら何でもそこまでやるか。日本軍が人体実験？ 確かあの細菌兵器のための生体実験は、ソ連のコミンテルンの流した偽情報だという噂もあったんじゃないかっけ」

落ち着きなく聞いていた色川さんは、混乱している。

「僕だって、そうあって欲しいよ。一日本人としてはね。……しかし残念ながら、まるきり嘘とはいえないんだな。たとえば、中国側のいう南京大虐殺の三十万人説は、規模や数字上は否定できたとしてもね。七三一部隊については、医学史的な研究も、ずいぶん専門家によって進められている。火のないころに煙は立たないさ。給水塔だったか煙突だったか、半壊の建物も一部残っているし、あの巨大な施設を、誰も単なる野戦病院だとは思わない。何しろ、戦時中の石井部隊は、東大よりも多くの予算を使っていたんだぜ。そもそも莫大な金を使って、本土の帝国大学の医学部でもできないような研究をやるって、一体、何をやらかしていたんだ？ 石井四郎は、大東亜共栄圏のアジア全域からエリートを集めて、大学を超えた軍のトップレベルの医学的研究機関を作ろうとしていたという説もある。それに喜作さんの話には、登戸から来た先生だの、戸山から来た先生だの、いろんな軍医の話が、不用意に出てくるんだ。奴さん、こっちがその辺の事情を知らないと思ってね。丹下バーで酒飲ませると、口がめっぽう軽くなる」

「ほほう。石井四郎を、辛島四郎が追う……の巻ですか」

茶化すように色川さんがいった。

「あのねえ、キミ。ちゃんと聞きなさいよ――。登戸というのは、多摩川の向こうの登戸研究所だね。ここは第六研といわれて毒ガスを研究していた。戸山の方は、軍医の養成所だった陸軍軍医学校だ。戦後、石井四郎がGHQと裏取引したおかげで、戦犯を逃れた子分達が、京都大学や、国の研究機関、エイズ問題で注目されたミドリ十字や、大手製薬会社などに再就職していった。それらの先生が教えている大学や病院のちょっとした仕事を、丹下建設は請け負ってきたわけなんだ。まるで秘密を共有する口の堅いシンジケートだね。というわけで、ここで満州で結びついた軍部と土建屋とが、一筋の赤い糸でつながってくるというわけなんだ」

「その、戸山というのは、戦後しばらく戸山ヶ原とかいわれて、だだっ広い空地になっていたところな。高田馬場の近くの」

先輩に叱られた色川さんは、照れ隠しに僕に解説するかのように入った。

「ススキとか、セイタカアワダチソウとか、雑草の海に蔽われていてさ。寺山修司や唐十郎が、テントを張ってアングラ芝居やっていた。もっとも俺は、そこでの演劇は見たことないんだけどさ」

「あら、ウチの劇団も、昔むかし一二度やったわよ。あそこねえ、なんか一時、地下から何百体か古い遺体が出て来たっていう気味悪い騒ぎが、あったじゃない」

ママが喋りながら長いお箸を取って、何かを口に入れた。

作りかけのおつまみの味見をしているらしい。

「そう。どこで行なったのか、人体実験の噂もあったしね。つまり、登戸の毒ガス研と、戸山の軍医学校、ハルピンの石井部隊という医学的なネットワークがあるんだな」

「つまり、丹下会長をつつけば、その辺が見えてくるというわけか……。それって、けっこうヤバくないですか」

僕には辛島さんが、いままでとは別の人間に見えて来た。

「ヤバイよ。……さっきのテープだが、律子がなんであんなにパフォーマンスを見せつけるかという、喜作はあれで、長男の聡太郎のことが諦め切れないわけ。一応、実績のある番頭格だった高村伸雄を、律子の婿養子にさせて経営の守備を固めたものの、長男は長男という、昔流の古い考え方なんだな。一緒に住んで自分の世話をさせてるのは、長男の嫁の小夜子だしね。それで律子はライバルの芽を潰しておいて、自分がいなけりゃ、会社も、喜作会長も、何一つ決定できないような体制を、一日も早く作り上げたいわけなんだ」

人間関係が、ますます錯綜してきた。僕は何だっただけ、こんな一家とつきあわなければならぬのだろうと、訝った。

「それに、一昨年に倒れて療養中の喜作の妻、絹江。この人はなかなかしっかり者の賢夫人らしい。彼女の介抱も、小夜子がやっているわけ。律子としては、父親の喜作と、あの成城の和洋折衷の館と一緒に住んでないことが、来るべきXデーの遺産相続で、決定的なウィークポイントになると思っているわけだ。もっともこれも、バブル経済崩壊前までの話という気もするけどね。律子夫婦は成城の近くの世田谷の砦の方に、瀟洒な芝生の庭つきの家を構えている。その広い花壇のある庭で、あの尊大なボルゾイ犬が、陽の光の下でスプリンクラーの水滴を浴びて、跳ね回っているわけだよ」

「何だか重役社員みたいですよ、あのお犬様自身が」

「奴も一応、傲岸不遜な丹下ファミリーだからね。フフフ。……小夜子と律子とが、それこそ、もう犬猿の仲。小夜子というのは律子と反対に、和服の似合う控えめな京女で、瓜実顔の美人。日本的というのか、言葉遣いはしごく丁寧で婉曲なもの言いをするけど、あとになってみると、いいように事が動かされていることも多いという、相当にしたたかな女らしい。なにしろ玉の輿に乗ったわけだからね。あの人の良いヒグマさんを、ロボットにしてうまい具合に操縦している。どうも、いまに見ておれ律子、という腹だねありゃ。能面みたいで、何考えているかわからないが、喜作のお気に入りなんだ」

「喜作ってのは、もともとが田舎者の成り上がりだから、京女の洗練には一種の憧れがあるのか

もね」と色川さん。

「まあ、それもあるだろう。むしろ聡太郎よりも親父の喜作が二人の結婚話に熱心だったとか。古株社員によると、小夜子というのは喜作の昔の愛人に似ているそうだ。あの爺さんの全盛期に、十年ぐらい関係が続いた先斗町の舞子あがりの磯乃とかいう女の面影があるっていうんだね。……ただ、子種がないんだな、あの夫婦は。聡太郎に原因があるらしいけど。それで律子は、いまのところ優位に立っている」

「はあ。社長って、ぼわーっとしてて、何となくそういう感じはしますわな。ムイシュキン公爵か。それにしてもあの喜作爺さん、好みがはっきりしてますわね。メチャクチャ派手な金髪女か、純和風か」

色川さんは楊枝を口の端に挟んで上下させ、顔をしかめた。

「非常に分かりやすい。……だから律子としては、すでにカウンドダウンにさしかかった遺産のこともあるし、Xデーに向けてもう気が気じゃないわけよ。それでことあるごとに、異母兄弟の聡太郎の無能さを際立たせて、会社も財産も、自分たち夫婦のものにしようと画策していたわけ。しかしこの不況でどうなることやら」

「は、なァーる。……TCIA長官にも、思わぬ天敵がいたわけだ」

色川さんはつぶやいた。

――音楽がそこでとまり、ママさんが食器を洗う水道の音だけが響いていた。

バーボンやウイスキーの並ぶ棚の脇の暗がりに、ジャズの古いレコードやCDが詰め込まれている。レコードを包んだビニールは、とうの昔に褐色に変色していた。

「ところで僕、前から辛島さんに訊こうと思ってたんですけど、鷺巣数光っていう建築家は、今どうしてるんですか。例の事件を起こしちゃった後」

思いきって、かねがね気になっていたことを尋ねてみた。

辛島さんは、さっき僕が注いだビールを一口飲んでから、「ワシス氏ねえ」とつぶやき、灰色の髪を掻きあげると、感慨深げに天井を見た。

「鷺巣さん、会いたいわァ。あれから全然来てくれないなんて、水臭いじゃないよねえ。もう、来てくれたら、何だってしてあげちゃうのにィ」

色川さんが、いきなりゴホゴホとむせた。

「ママさんも、知ってるんですか」

「だってもともとは鷺巣さんが昔、新宿に移ってくる前の『サビーヌ』の常連だったのよ。そこに辛島さんのことも、連れてきてくれたんだもの」

「鷺巣氏とは昔、ある企業のショールームの設計の取材で知り合ったんだ。いま彼は群馬だったか栃木だったかの田舎に引き籠っているという話だな。一時は斬新な作りで、けっこう注目された建築家だった。会社で特別に与えられた個室とは別に、乃木坂に設計事務所を構えていたあの

頃が、最盛期じゃないかな。カナダの地方都市の自然博物館か何かの設計コンペに敗れたあと、
年来の父親とのいざこざが重なってね。……実は鷺巣数光は、丹下喜作の私生児だという噂があ
ってね。それも影響してるんだよ」

僕は思わず飲んでいたビールを吐き出しそうになった。隣の色川さんは、実際、激しく咽せて
いる。

「どういうことですか。なんだってまた」

「いや、社内では知られた話。鷺巣については、後輩の芸大建築科の連中が作成したビデオがあ
るから、今度見せてやるよ。事件後というか出所後の、いわば単独会見てやつかな。詳細は、そ
のときでも話そう」

「だってそうなる『父親殺しの建築家』というのは、どういうことになるんですか。そもそも
、喜作会長に似ていないじゃないですか」

「そうだよ、似ていないんだ」

「えーっ、わけわかんないよ」僕はどういうわけか、憤慨していた。

「つまり、父親が二人いるわけさ」

そこで奇妙な沈黙が降りた。

「またまた勿体ぶっちゃって。辛島さんの悪い癖だな、もう。そういうふう暗示的に言うの」
色川さんは舌打ちした。

「いろいろあるのよ」ママさんが手を洗いながら、寂しそうに呟いた。「いろいろねえ。真実が
どうだこうだというより、鷺巣さんは、そういうふう育てられてしまったのよ、実の父親に」

「ええ？」

「お前は俺の子なんかじゃあない。あの丹下という爺ィのタネなんだってね。それを鷺巣さんは
本当の父親からずっといわれながら育ったのよ。それが何ていうのかしら、トラウマになってい
るの。可哀想に」

「何の、ために」

「さあ。それは鷺巣利光という冷酷な偏屈男のせい。……としかいいようがないんじゃないか
しら」

「まあ、あんな親父を持ったワシス氏の悲劇なのさ。いや、僕だけかと思ったら、案外、鷺巣数
光を知る人間は悪く言う人は少ないんだ。ちょっと気障だが、いい奴だからね。ただ、言ってい
ることは、小難しいというか、哲学的というか、むしろ夢物語みたいなのところがあって、現実的
な僕なんかには、ちょっとついていけないところがあるんだ。奴さん、建築や美術はもちろん
だが、神話学やら宗教やら形而上学やら、グノーシス派やらネオ・プラトニズムやら、すぐにそ
っちの話題に走ってしまう。それはともかく、一時期、国内外の賞を獲って、注目された才能だ
ったので、ジェラシーから奴の失墜を喜んでる連中はけっこう多いけど、わりと同情的な昔か
らの友人もいるんだよ」

「そうよねえ。もったいないのよ、鷺巣さん。ほとんど隠遁生活しているみたいな感じだけど」

ママは語気を強め、横をむいて、タバコの煙を吐いた。

「どんな感じの方なんですか、鷺巣数光ってヒト」

「そうねえ、髭を生やしてて、いかにも威厳のあるマイスターって感じよね、ドイツあたりの。セクシーよ、男としても」

ママはうっとり目を細めた。

「そんでさあ、面白いのよねえ、ここで二人の議論聞いていると。辛島さんはこの現実社会を変えなくてはならないという正義派の人じゃない。一方の鷺巣さんは、宇宙だの、永遠だの、生命だの、すぐ話がそっちの方に行っちゃうの。評論家と夢想家というか。全然、話が噛み合っていないのよねえ。この変なジャーナリストと、変な建築家。……それでいて、とつぜん意気投合しちゃったりして、立ち上がって並んで乾杯したりして、カワイイったらありゃしない。凄く、おかしいの。ワシス&カラシマのみょうちくりんなコンビって」

すると辛島さんは、朗らかに声を出して笑った。

「ワシス氏にいわせると、僕たち二人の違いは、地上派と超地上派なんだそうだ。もちろん、鷺巣の方が地上を超えている天空の存在、ということらしい。……おいおい、建築家が地上を離れて、どうするんだよと、僕はよくいってやるんだけどね」

「二人並ぶと、そうねえ。あたしに言わせると、作曲家とバイオリニストって、感じかしら」

「どっちが作曲家で、どっちが……？」色川さん。

「もちろん、鷺巣さんが大作曲家で、辛島さんが名バイオリニストよ」

「ははは。おべっか使ってくれてありがとう。二人とも、音楽の方は聴く一方だよ」

辛島さんがパイプを離して、笑った。

「あら、でも、バイオリンを顎で挟んで、肘をこういうふうに張ってポーズとったら、とっても似合うわよ、辛島さん。ハンガリーかルーマニアあたりの演奏家」

ママさんは少しおどけて頭をそらし、グラマラスな体をひねり、バイオリン弾きの恰好を見せて見せた。

「その灰色の蓬髪と、メタルフレームの眼鏡がね、いかにもという……」

色川さんも、渋い目つきをして、からかった。

しかし、僕は頭が混乱してきた。

こんなしょうもない冗談をいって、いいのだろうか。そのワシス氏は、世間的にはともかく人殺しの犯罪者なのだ。でも、そこにこだわっている僕は、あまりに常識的すぎる心の狭い人間なのだろうか。

とりあえず、いまの辛島さんの話では、少なくとも鷺巣数光は、土建屋の喜作会長の子供ではないことだけは確からしい。何となく僕はホッとした。とはいえ、それもまたおかしな話で、なんだって会ったことすらもない一建築家の出生の秘密に、この僕が、一喜一憂しなければならないのだろう。こんな話は、丹下喜作の自叙伝『人生連峰』にすら関係ない、余計な話なのだ。

「しかしさ。いまいち、よくわからんのよねえ。このオッサン、オバハン達のいっていること。とくに丹下ファミリーと、鷺巣家の絡み合いがさ」

色川さんが隣で、貧乏ゆすりを始めた。

するとオバハンといわれたママが睨みつけ、右手でピストルの形を作って、厚めの唇を尖らせて「バン！」と撃つ真似をした。

それに応じて体をびくりとさせ、カウンターに伏せてちょっと死ぬマネをしてみせる猪八戒。こういうところは、大阪人並みのサービス精神だ。

「……つまりねえ、これは、暗い暗い話なんだよ」

しかし辛島さんは、色川さんを軽く無視して、語り始めた。

「終戦後のどさくさの中、彫刻家志望だった鷺巣利光は、つまり、ワシス氏の親父だね、彼は日々の糧を手に入れるために、自分の恋人を美術学校のヌード・モデルにしたり、進駐軍の将校の愛人にしたりしていたんだ。彼女はエキゾチックな顔立ちの美人で、ルイーズとか、ルルとか綽名されていた。当時、作家や芸術家に人気だったハリウッド女優のルイーズ・ブルックスに似ているというわけだな。なるほど、写真を見ると、目の大きな、断髪で色白のコケティッシュな女で、ちょっと品のいい小悪魔ふうなんだね。来栖瑠璃子とって、実家は群馬の裕福な地主だか山持ちだかの娘だったが、絵描き志望で東京の女子美に入り、マリー・ローランサンの真似事のような甘ったるい絵を描いていたというさ。素人お嬢ちゃんのおままごとで、才能の方はさっぱりだったらしいけど。そのうちモデルとして、復活してきた画壇の巨匠達の指名まで受けるようになった。利光の彫刻は一部で注目されていたものの、むしろ、女のヒモとして寄生する味を覚えてしまったわけなんだ」

「建築家の父親は、彫刻家だったんですか」

「そう。才能は確かにあった。作品の写真を見ればわかるよ。ジャコメッティとジャコモ・マンズーと、古代彫刻をまぜたような」

「は。さっぱり、わからん」そっぽを向く色川さん。

「それと、いまでいうジャンクアートみたいなものも、いっぱい残している。いわば、廃物を組み上げた立体コラージュだね。こちらの系列の作品は、ティンゲリーに似た感触がある。ちなみにこの親父の鷺巣利光も、なかなかの二枚目で、パリで客死した画家の佐伯祐三に似ているちょっと憂いのある風貌なんだね。ルパシカを着た鷺巣利光と、モダンガールふうの来栖瑠璃子。二人が並んだ写真を見たが、いかにも当時の先端の若手芸術家夫婦といった印象なんだ。そりゃあ、なにしろ見かけだけは、天才・佐伯祐三とルイーズ・ブルックスだからね。利光の作品はまだ、どこか地方都市の土蔵に残っているらしいけど、世の中には、そういう好事家もいるんだねえ。それはともかく、昭和二十年代、名もない美大生が生きていく術は、他にはなかった」

「いい女は、体一つあれば、どんな時代でも生きていけるわけだ。つまり、利光さんは、女衞、ポンビキになっちゃった、と」と色川さん。

「女衞だけではなくて、鷺巣利光は、鎌倉や逗子の著名画家たちの戦争中の行いをこっそりと調べようになったんだ。ある程度、自分の恋人と関係を深めたと見ると、おもむろに乗り込んでいくわけさ。著名画家が変名で描いた何枚かの絵の証拠写真と、徹夜で書いた美術評論ともエッセイともつかない脅迫文を持っていく。少しでも戦争協力者の影があると、その情報を使ってゆずりはじめるわけよ。こちらにはツテがあるんで、この記事が美術雑誌や週刊誌に売り飛ばすぞってね。相手は、時局にあわせて大政翼賛、挙国一致の雰囲気の中で、プロパガンダの戦争画を描いただけでなく、表現者たちの弾圧の当局側にまわっていた大御所連中さ。つまり緑川洋之介、芦川蒼望などの洋画・日本画の巨匠たちだね。もっと小物でも、戦後またぞろ復活してきた文

化人・知識人たちは、戦中の動きではあまりふれられたくないような過去が、いろいろあった。利光は、画学生やモデルの情報網を使って、芸術院クラスの画壇長老たちのヒトには知られたくない裏の弱みを、一つひとつ掴んでいった。奴さん、議論は得意なんで、もっともらしい倫理的芸術的な理屈をつけてね。戦争中旗振り役だった彫刻家の高村光太郎のところにも何度か行ったらしいが、不在だった。多分、戦後になって批判を浴びた光太郎は、その頃、東北の寒村に籠っていたのではないかな。

それでさ、笑っちゃうのは藤田嗣治の逸話だ。戦争画を多く描いていたあのレオナルド・フジタをゆすりにいったところ、珍しいワインを出されて、パリでの苦勞話を聞かされたらしい。君もこんなことやってないで、彫刻を作らなければいけない、人生は短い、とかなんとか諄々と説教されて、しゅんとして帰って来たという話。やはりトシミツも、根っ子のところはウブな芸術青年なんだね。

……ワシス氏によると、父親はよく一人で大声を出して、芸術論の練習をしていたそうだ。いまでいうディベートかな。当時は、階段下に一人で座って、ノートを見ながらヒットラーのように腕を上げ下げして演説していたんで、子供の頃は何をやっていたのかわからなかったが、あとになって、ようやく背景がわかったってね。父親がひどく孤独に見えたそうだ。しかし結局、トシミツさんの狙いは、金なのさ。ある意味では、成功した芸術家個人を狙った総会屋みたいなもんだな」

「藤田嗣治って、あのオカッパ頭にチョビ髭の画家ですよ」僕は溜息をついた。「……しかし、人間て、なんという」

「結局は、色と脅迫。飴とムチだな」色川さんが続けた。

「さあて、そこに、スッポンのように首をつっこんで来たのが、戦中の満鉄上層部や、関東軍将校とコネを作っていた丹下喜作というわけなんだ。ある秘密のルートから、仕事は手堅く発展させていった。GHQはなにしろ、戦前のトップ層の半分以上を巣鴨で処刑した。デス・バイ・ハンギングだ」

辛島さんはそこで喉元を、パイプの先で引っ搔いて見せた。絞首刑の意味らしい。

「それでビビらせた残りの半分の連中を使って、この日本を上から統治させたわけだからね。喜作さんは、その生き残り人脈の裏口から仕事を得て、業績を伸ばしてきたんだ。どういうわけか、大病院や医大系の土建仕事も入ってきた。まあ、もっとも、昭和三十年代四十年代というのは、なにしろ、放っておいてもビルがどんどん筍のように建っていく時代だから、あまりその辺の闇だけにフォーカスするのは、不当かも知れんが。とにかく、この満州帰りのオヤジ、金だけは湯水のように使っていたんだ。

そんなある日のこと、銀座だったか赤坂だったかのバーで、たまたま手伝いに店に出ていた利光の愛人の瑠璃子、つまりルイズを一目見て、頭がポオーっとなってしまったわけ。彼女は、大陸浪人で埃っぽい裏仕事ばかりやってきた田舎者の喜作にとって、いままで見たこともないハイカラな、洗練された都会的な雰囲気の花嫁だったんだらうな。妖精か天使に見えたんだらう。瑠璃子の話から、新たな獲物が来たと思った鷲巣利光は、岩陰に潜むウツボのように、入念に良からぬ計画を企てた。丹下喜作にフィアンセを貸し出す愛人契約を結んだんだ」

「うーん」

「よくやるわ、トシミツさん」

「これでようやく、瑠璃子との生活が安定してきたものの、すでにゆすりばかりで食っていた利光は、レオナルド・フジタの説教も虚しく、売れない彫刻に打ち込むだけのかつての志も執念も失ってしまった。気持ちもすっかりすさんでいた。朝鮮戦争特需も手伝って、そろそろ経済の回復とともに、文化や芸術が復活していく時勢だった。その前後に生まれたのが、鷺巣数光だ。さて、そうなる、と、せっかくだから、養育費も筆り取ってやろうと利光は考えた。ルーズを使って、喜作の子供だということを本人にのみ込ませた。あの鬼の喜作も、彼女にはめっぽう甘い。あるいは、騙されたふりをするのが、過去の自分の悪業への贖罪だとも思ったのかね。家族に知られないような額で、大した金じゃないしお互いに曖昧なままがいい。何よりも膝の上で甘えてみせる瑠璃子に離れられなくなかった。

瑠璃子の方は、しかし、野生の本能を失ったペットの牝猫のように、子供を育てる資質がさっぱりなかったんだね。むしろ物心ついてからの鷺巣少年は、こんな情緒不安定で、折檻してくる親父を怖がっているばかりの美しい母親、それでいて息子に愚痴ばかりいってすがりついてくるような母を、何とか自分が支えなければならぬと、けなげにも思ったらしい」

「それって、小さい男の子の騎士道精神ていうやつよ」ママがいった。「いじらしいじゃないのさ」

「父親のトシミツさんはもとより問題だが、母親も、相当に心を病んでおりますわな……」と色川さん。

「かつて瑠璃子ルーズは、愛する亭主のために、ヌードモデルや、有力者の愛人をやっているつもりでいた。そのうちに、自分も芸術のミューズだの、美しい詩神だの言われて、ちやほやされるようになってきたわけだ。外人を含めた金持ち達のサロンや、軽井沢や箱根の別荘に呼ばれるようになってくると、世間を見る目が違ってきた。亭主の心がいなさ、芯根の腐ったところにうんざりしてきた。つまり、田舎の土地持ちのちょっとぶっとんだお嬢様が、そこでようやく世間というものを知ったわけだ。以前は、利光の才能を無邪気に信じる可愛い素敵なお人形さんにすぎなかったのに、だんだん亭主に口答えするようになってきた。お互いの傷口を刺しあい、塩を塗り込むような、陰惨な喧嘩が絶えなくなった。実はこのころから、かつての美少女ルーズは、神経を病んでいたという噂もある。しかも、横須賀や横浜の不良外人の集まるパーティーで、いいように弄ばれて、覚醒剤や睡眠薬を常習するようになり、売人から入手した薬物を利光とも共有していた」

「時代背景も、なんか複雑ですね」

「最初の頃は利光も、長男が生まれたとって人並みに喜んでいて。小さな体を両手で持ち上げて、高い高い、をしてね。だが、そのうち次第に、拗ね者特有のひねくれた性格が出てきた。常習していた薬物のせい、自分で捏造した冗談が実体を持ち始め、リアルな妄想になってきた。物心ついてきた数光に、『お前は俺の子じゃない。俺のタネじゃねえ』と囁くようになってきた。出来心から創り上げた嘘が、被害妄想になってきた。自業自得なんだけどね。瑠璃子を殴る、蹴る、ひっぱたく、だけじゃなくて、息子の言動などで、気に食わないことがあるたびに

、思春期の数光にこっそりと近づいて、『キサマは本当は丹下のじじいの子供だ』『あの女の腹の中で、喜作ジジイと俺の精液がまじりあって、お前みたいなのが、間違っでできちまったんだ』と、怖ろしい顔をしてささやくんだ。飯を食べていると、『テメエなんか、この世に、望まれて生まれてきたわけじゃない。墮さなかつただけ、ありがたく思えよ』とね」

「なに、それ！」僕はほとんど、義憤を感じていた。「サイテー。ひどい親父」

「行きつけの飲み屋でいさかいがあって、むしゃくしゃしているときなどにも、『こら、丹下数光、いい気になっているんじゃないぞ』と、皿やコップを投げて息子にあたった。酷いのは『丹下の野郎に生体実験されちまえ』。これなんかも、子供には何のことかわからない。マルタともいわれたらしい。要するに利光は、すでに丹下喜作の秘密をつかんでいたんだな。しかし息子の方は、なぜこんなに、父親から疎まれるのかがわからなかった」

「マルタって、ええと、人体実験に使う人間ををさす隠語ですよね」

「そうなんだよね。よりによって、わが子に向かって、そんな言葉を吐くかって」

「……ヘンタイ、です。その方」

色川さんは、硬直した表情でいった。僕もうなずく。

「父親失格。性格破綻者さ。一方、利光にふりまわされてきた彼の母親の瑠璃子は、躁状態と鬱状態とをひんぱんに繰り返すようになり、睡眠薬中毒になっていった。荒れた生活と薬物によって、脳と神経がだんだん破壊されていった。昼間でも夢うつつの放心状態さ。もはや、かつてのルイズ・ブルックスの面影はない。そのうち、息子を唯一の味方、いや、恋人のように思うようになった。鷺巣氏は――これは建築家の数光の方だけどね、そういう環境の中で、思春期を迎えていったんだ」

僕と色川さんは、天井を仰いで溜息をついた。

「それで、いよいよ、運命の日を迎えるわけですか」

色川猪八戒が、深刻な表情をして、腕組みをした。

「うん。そう。……たしか親父さんを殺したときは、何か鈍器のようなものでやったらしいんだ。殺される瞬間、相手は泣き笑いのような顔になって、つぶやいた。『そうだ、そうあるべきだ。カズ、そうあるべきなんだ。お前はちっとも悪くない。悪くないんだよ』ええと、正確には覚えてないんだが」

辛島さんはパイプをくゆらし、記憶をたどるように目を細めた。

「……『これは俺が望んだんだ。俺は生涯、自分が憎くて憎くてたまらなかった。よくやった。ありがとう。息子よ、わが子よ、鷺巣数光よ。お前さんは正しい。カズちゃん、手にかけてくれて、ありがとう』そんなふうについて、そんなふうについてだねえ、ふるえる両手を差し出したというんだよ。これは奴さんから、じかに聞いた話だからね。そして、その瞬間、ワシス氏の目前に、四歳か五歳の男の子の姿をした小さな自分が、すっくりと立ち上がったというんだ。異常心理の幻覚みたいなものだろうな。心の奥に封じ込められ、成長を止めていた幼児のままの自分が、小さな影のように立ち上がった。そして、幻の子供は前に進むと、血だらけの父の顔を、いとおしげに小さな手で、撫で回したという。すると利光の顔も、あの「高い高い」をしてくれた若い頃の顔に戻って、パッと輝いた。佐伯祐三にも似た若い頃の顔に。そして、苦痛にゆがん

だ父の両目から、みるみる涙があふれてきたというよ。息を引き取る前の最後の利光の言葉は『ゆるせ、ゆるせよ、ゆるしてくれ。君は、俺の分身だ』……だったそうだ」

唾液が喉元にこみ上げ、息が苦しくなってきた。

「……気がついたときには、あたり一面が血の海になり、笑顔と苦痛のまじった顔で死んでいる親父の遺体があった。そして、奥の柱にもたれるようにして、割れて散乱した鋭いガラスの破片を、幼女のように一枚一枚つまみながら、シャンソンを低く口ずさんでいた母親の瑠璃子の姿があった。血の滲んだ白い指先で、細く鋭く割れたガラス板をつまみ、鶴だか白鳥だかの姿をかたどっていたらしい。もはや壊れてしまった、狂気のルーズだ。……父親を殺そうとして、はじめて父は、本当の息子として自分を承認してくれた。これはワシス氏本人の言葉なんだけどね。――というわけで『父親殺しの建築家』の話、これで背景については、ある程度は伝わったかとは思いますが」

カウンターの中空に、紫煙がよどんでいる。そのけむりは、鈍い裸電球の光を透かしていた。すでに深夜をだいぶ廻っていた。

客は僕たち以外に、三人の中年男性のグループと、三十代のカップル、それに陰気な中年男が一人で寡黙に飲んでいるだけとなった。

「でも辛島さん、すごい取材力ですね。尊敬しちゃいますよ」

「ツトムも、見習っとけよ」

色川さんが先輩風を吹かせた。

しかし二人とも、演技をしていた。冷静さを装っていたのだ。

「なに、こりゃあ、取材なんかじゃないさ。ビジネスライクな話をしたつもりはない。善悪は別として、そういうふうには、生きられなかった家族がいたという、人間の物語さ。ワシス氏本人から聞いた話ですよ。出所後、ほとぼりが冷めてから、何晩か、じっくりと語りあったんだ。もちろん、利光については、その他の数人の情報源から再構成している。複数の良質のソース確保してるからね。まあ、そんなこというと、ゴシップ漁りの鷺巣トシミツとどう違うんだという話になっちゃうけどさ、ははは。それと僕らの世代は、ああいう喜作みたいな権威主義的なオヤジを見ると、どうにもムカムカする性分があつてねえ。ピンボー左翼の反権力の思考パターンから、いまだに抜けられないと言うか」

「辛島さんみたいな、いっぱいいるのよこの辺」

ママさんが、口を挟んだ。

「団塊の世代ってこと？ 嫌なこと言うなァ」

「あたしもさ、昔一時つき合ってた男が、機動隊にやられちゃってサ。半身不随。今もときどき、千葉の病院に見舞いに行ったりするんだけど」

「ほう、それはそれは。でも不思議なもので、これらの話の入り口は、すべて丹下喜作サンだったわけだからねえ。変な気分さ。……ただねえ、最近会社の方から圧力かかってきてねえ。こないだ社長に呼ばれちゃったよ」

「本当ですか」僕は、喜作会長が『経済人脈』社の顧問に「一言入れた」のかもしれないと思

った。

「うん。やりにくくてねえ」

辛島さんは、パイプを外すと苦笑いをしながら肩を聳やかした。

「あいつ、奥にいる蟹みたいな顔した男。よくついてくるんだ。別の店でも最近どういうわけか、不思議とばったり会うんだよ」

彼は、薄暗い角のテーブルで独りで梅干入りの焼酎のお湯割りを飲んでいる男を、視線で示した。

コートを着たままの姿で座っており、粘土のような顔色で、えらの張った四角い顔の眼窩のくぼんだ男だった。口の中から赤黒い種のようなものを吐き出し、それをティッシュで丁寧に拭き取っていた。赤く濡れた厚い唇から、唾液が長く糸を引く。

男はそのティッシュを少し離してしばらく眺めてから、どういうわけか、よれよれのコートの中にしまい込む。何となく不潔で陰湿な感じが漂っていた。

「常連？」

「違うわよ、ごく最近の客。いつも誰とも話さないわ。今日も、ずっと辛島さんのこと、背中からうかがうように見ているのよ、アイツ」

ママは顔をカウンターに近づけ、声をひそめた。

蟹の甲羅みたいな顔をしたエラの張った男は、ときおり、ここは一体どういう店なんだとでもいうふうに眉をつり上げ、演劇や映画のポスターの貼ってある汚い壁を、うさん臭そうに眺めている。

「どうも会社側が、興信所とか探偵事務所使ってるんじゃないかと思うんだけど」

辛島さんは、コップの中のビールの残りを、いまいましげに一気にあおった。

(続く)

10 軍艦ビルの中のラビリンス

<http://p.booklog.jp/book/98468/read>

1 丹下会長は片腕のない白髪鬼で…

<http://p.booklog.jp/book/97575/read>

2 そして、戦艦のような建物の中へ

<http://p.booklog.jp/book/97692/read>

3 第一印象で、もう落第

<http://p.booklog.jp/book/97717/read>

4 前途多難。白髪鬼からのヒアリング

<http://p.booklog.jp/book/97734/read>

5 父親殺しの建築家。旧左翼ふうジャーナリスト

<http://p.booklog.jp/book/97775/read>

6 満州で馬賊の親分になりたかったのさ

<http://p.booklog.jp/book/97814/read>

7 「ハルピンの悪魔城」を思わせる私邸には

<http://p.booklog.jp/book/97885/read>

8 最高会議は家族会議。妄想のユージェニクス

<http://p.booklog.jp/book/97960/read>

10 軍艦ビルの中のラビリンス

<http://p.booklog.jp/book/98468/read>

